

受講生に変容をもたらす総合演習の探求

— 「学園祭展示に位置づけた中間発表」と 「他者評価及び相互評価」を核とした検証 —

幼児教育学科 善野 八千子

第1章 問題と目的

1. 「総合演習」設定の意図

今日、教員の資質向上が喫緊の課題となり、このことに関する取り組みが国によって牽引されている。この出発点は教育職員養成審議会（1997年7月28日）で発表された「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」（第一次答申）である。この答申をふまえた教育職員免許法の改正においては、大きな変更点や新設科目が見られ、注目すべき点として「総合演習」という新設科目がある。

この科目は「教職員免許法施行規則の一部を改正する省令」（第6条1項）が定めるところでは、「人類に共通する課題、または我が国社会全体に関わる課題のうち一つ以上に関わる分析、及び検討並びにその課題について、幼児・児童・または生徒を指導するための方法及び技術を含むものとする。」（1998年）とされている。

さらに、「育ちと学びの連続」という視点でみると、小・中・高等学校の「総合的な学習の時間」（以下、「総合学習」と略記）と関わりが深い。2002年の改訂では、「生きる力」の育成を目指し、各学校が創意工夫を生かして、これまでの教科の枠を超えた学習などができる「総合学習」が新設された。これまでとかく画一的といわれる学校の授業を変えて、地域や学校、子どもたちの実態に応じ、学校が創意工夫を生かして特色ある教育活動が行える時間を設定し、国際理解、情報、環境、福祉・健康など従来の教科をまたがるような課題に関する学習を行える時間として新しく設けられた。小学校では3年生以上から週当たり3時間程度、中学校では週当たり2～4時間程度、高等学校では卒業までに3～6単位配当された。この時間では、子どもたちが各教科等の学習で得た個々の知識を結び付け、総合的に働かせることができるようにすることを目指している。

「総合学習」では、知識を教え込むのではなく、自ら課題を設けて行う学習や将来の生き方を考える学習が積極的に行われる。自ら学び、自ら考える力の育成、学び方や調べ方を身に付けることをねらいとした授業が展開され、その内容は、各学校で決められる。国が一律に内容を示さず、各学校が創意工夫を発揮して行うことになった。従来の教科のように教科書もないのが現状である。

現在、われわれの周りには、環境問題、人種・民族問題、生命倫理などの人類に共通する課題や少子高齢社会と福祉問題、資源・エネルギー問題、消費者問題などのわが国のあり方をめぐる課題が山積している。これらの課題は、簡単に解決できる問題ではない。それ故に、解決に向けて積極的かつ継続的に取り組まなければならないと、とりわけ次世代を担う学生たちには、これらの課題を認識するとともに、

課題解決に向けて取り組む姿勢や能力の形成が求められている。したがって、これからの保育者・教員は、諸課題に関してしっかりとした知識を持ち、適切に指導できる事が求められる。総合演習は、保育者・教員をめざす者が、そのような知識や能力・技能を身に付けられるように設けられた科目である。

2. 研究の目的

従来の大学における授業は教員から学生への知識伝達「講義型」が主とされ、学生は「受動的学習者」であった。溝上慎一（2004）は、授業の形態として「講義型」と「学生主導型」の2つ、学習者の参加形態として「受動的学習者」と「能動的学習者」の2つを挙げ、これらの組み合わせによって現在行われている近年の大学授業改善を3つのタイプに分けている。本稿で考察対象とする筆者の授業は「講義型・能動的学習者」から「学生主導型・能動的学習者」へと変化していくものである。課題設定までの導入期は「講義型」であり、課題設定以降は「学生主導型」と変化する。しかし、一貫して学習者には能動的参加を求めるといえるものである。

総合演習は他の多くの講義型の授業とは違い、見学や参加・調査などの体験的学習を通して、教員としての資質や指導力を養うことを目的に設置された。最大の特徴は、教員による助言・アドバイスを手掛かり・ヒントとしつつ、学生自らの興味・関心に沿って課題や目標を設定して、その解決に向かって様々な活動を主体的に行う点にある。また授業の中間期に活動内容の展示発表会を予定し、育った力の評価は試験ではなく、具体的制作物やビデオ・パソコン・レジュメ等を用いての活動報告の発表会を実施し、これらの展示・発表も学生自身で準備・実行することとしている。

これからの幼児教育に関わる専門性を有する教員養成において求められることは「子どもの育ちの連続」についての理解と実践力である。また、新しい幼稚園教育要領及び保育指針では「保護者の子育てをサポートすること」が保育者に期待される役割の一つとして示されることも確かとなってきた。

そこで、総合演習での成果及び研究物が学内の学びにとどまることなく、保育の現場で子育て支援の資料として活用可能であり、かつ教員研修の場において発展性のあるもの、つまり学び続ける保育者の入り口に具体物をもって立たせたいと願うものでもある。

これまで「総合学習」の効果について検討した研究としては、高校総合学習で実施校・未実施校での質問紙調査により実施校の生徒の自己効力感が高いことを示した研究（山崎、2003）がある。しかし、終了時一時点の検討でなく、学生の学習プロセスに即した変容を元にした総合演習の探求についての研究はまだ散見できない。

そこで本研究においては、2005・2006年度総合演習の授業分析から具体的課題を次の2点とする。

- ①受講者に変容をもたらす総合演習の内容を特定する
- ②総合演習における「学園祭展示に位置づけた中間発表」と「他者評価及び相互評価」の有効性を検証する

それらの分析を通して、大学における授業改善の方策と支援の手がかりを得ることを本稿の目的とする。

第2章 幼児教育における総合演習の取り組み

養成課程のシークエンスからは、幼稚園教諭養成では我が国社会全体にかかわる課題分析の後に、それを幼児にどのように指導していくかを考えることになる。しかし、保育士養成課程では「幼児を指導するための方法及び技術」については想定されていない。幼保一元化の中で、これからの保育者に求められる力を考えるとき、このことで学びを分断したり分けたりしてするものではないと考える。

総合演習は、小・中学校では2002年度から、高等学校では2003年度から順次学年進行で施行された「総合学習」の理念と、教科の枠にとられない新しい授業のデザインを学ぶものである。小学校では430時間、中学校ではほぼ年間100時間を割いて行われる「総合学習」は、学校における学習を知識の伝達、暗記を中心とした学びからテーマを軸とする探究へと組み替える試みである。この試みは、保育者・教員を志す1人1人の学び方の変革なしには成り立たない。本演習では、「総合学習」が生み出された背景や思想を学ぶとともに、よき学び手としての保育者・教員の第一歩を踏み出すことを目的としている。幼児教育における総合演習では学生に育てたい力を「保育者としての実践力」とした。そこで、子どもの育ちを見通した課題設定力や表現力及び評価能力をつけることが保育者としての実践力を育てることにつながると考えた。

1. 2005年度総合演習の授業分析

まず、これまで行われてきた「総合学習」の実践から学び、「総合学習」の可能性についてのイメージをつかむ。その上で、個々にテーマを設定した調査研究をし、発表する。研究方法は個々にあるいは類似課題のグループで決定し、様々な形態でまとめていくこととした。随時、テキスト以外に学生が設定した課題に対応した文献、社会事象や新聞記事等の豊富な資料でもフォローアップを継続してきた。

しかし、次のような問題点が浮かび上がってきた。

【問題点1】学びの連続性

高等学校までに総合学習で学んだ学習経験が想起されない。もしくは勤労体験はしていても、「総合学習」の時間での学びの経験がほとんど無い。

【問題点2】スタディスキルの定着

学びの入り口である課題設定に個別指導の多くの時間を要し、解決活動のための基本的な情報収集・整理・活用・発信の方法等も身につけていない。

【問題点3】実習との関連性

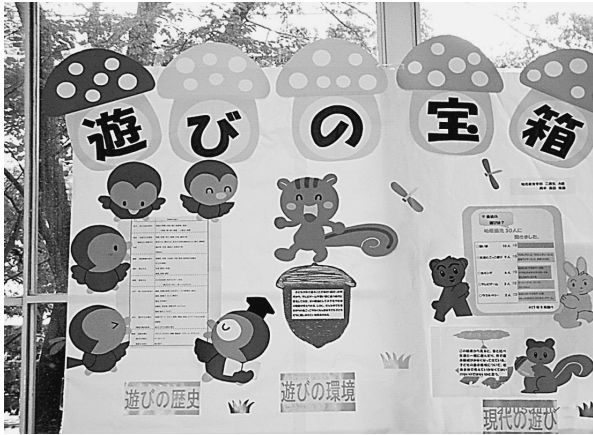
本来、実習体験は理論と実践を結びながら学ぶ有効な機会である。しかし、学生にとっては課題解決活動の分断となり思考が連続しにくい。授業者にとっては、時期がずれながら長期間に渡って、解決活動へのサポートが個別に必要（同じ授業を何度も実習のために欠席した学生個々に繰り返す）となる。

また、個々に課題設定した後に、学生が主体となって必要に応じてグルーピングしていく。当然、実習グループと総合演習の課題別グループは別であるため、グループで解決活動や調査にあたることが困難である。

上述の問題点はありながらも、受講者の特質を生かした制作物や他教科との総合知を活かした研究の

成果も見られた。

【成果】 学園祭展示を総合演習の中間発表と位置づけたことにより、付属幼稚園・関連保育園や近隣住民の幼児が研究物や制作物に直接触れたり、受講者が幼児に遊び方を教えたりすることができた。子ども理解に基づいた修正や改善の方向を見いだす機会としては有効であった。以下に一部を紹介する。



▲写真1 子どもの遊びの世界を広げることを目的とした展示。床面には直接体験できる学生7種の手作りおもちゃのコーナーを特設している。



▲写真2 学園祭に訪れた園児に遊び方を教える学生

「はらぺこあおむし」立体絵本で遊ぶ園児



←絵本の世界を立体で表現して幼児に体で活動に浸らせるもの行列ができるほどの人気ぶり

材料は大型電器店から廃材を調達して作成している。

周りには他の絵本紹介やお話の世界を展示している。

また、授業後のリフレクションシートには、受講者の満足感・達成感を抽出できる表現が90%あった。その内容は「実際に子どもに働きかける研究になるか不安だったが、ようやく学びの最後に大きな結果や成果として形あるものができ、みんなに伝えられて感動した。」「初めてこのようなゴールに向かって、たどり着く学び方を実感した。」「自分にもここまでできることや保育者を目指す仲間のすごい力を誇りに思う。」(抜粋)等が代表的なものである。

しかし、これらの満足感は自己実現の喜びではあっても、本来「総合演習」がめざす生き方の更新やこれからの保育者として求められる「子育て支援」につながるとは言い難い。

そこで、次の2点の変容を求めて次年度の授業改善に取り組むことを総括とした。

- (1) 課題設定能力を育成する
- (2) 表現力、評価能力を高める

2. 2006年度総合演習 授業の実際

2005年度総合演習についての授業者の振り返りから、2006年度総合演習では課題解決に向けて、以下の2点の仮説をもとに授業を進めることとした。

(1) 受講者に課題設定力の変容をもたらすために

導入期に昨年度の研究物の展示見学等から学ぶ機会を設定することによって、学ぶ意欲を喚起し具体的な活動の見通しをもたせることができる。

また、「保育現場で活用できる研究物を完成させ、子どもへの願いを発信する」という具体的かつ共通のゴールを示すことで、課題設定能力を育成することができる。

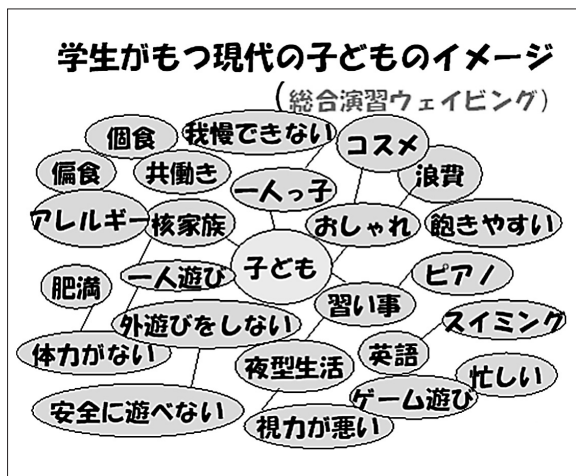
(2) 受講者に表現力、評価能力の変容をもたらすために

① 学園祭展示を中間発表として位置づけ、来校者によって研究物に対する評価やアンケート協力を得て、他者から学び、子ども理解に基づく問題解決ができる。

② 中間発表後に学生同士が相互評価することによって、最終発表で表現力と評価能力を高めることができる。

(1) 課題設定力の変容をもたらすために

総合演習の作品展示室を確保して2005年度の研究物から学ぶ環境を整え、作品展示室を見学しながら



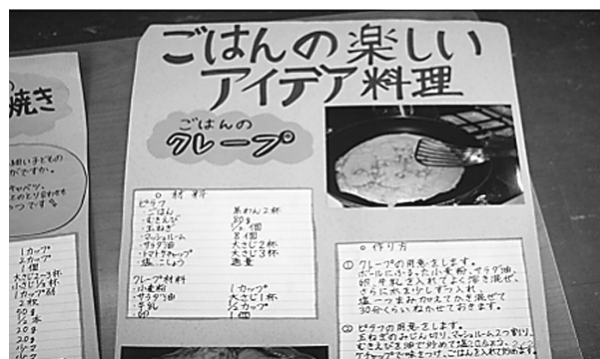
昨年度の研究物から学ぶことを導入期に設定した。

また 現代の子どもの実態について、受講者一人一人がもつ子どものイメージや知っている情報・事例からウェイビングに表し、「現代の子どもについて」を情報交換し共有する時間を設定した。子どもの生活を改善したり、豊かにしたりするためには、子どもへの直接的な働きかけだけでなく子どもに関わる保護者への支援が必要であるという認識が深められ、保護者に向けて発信する研究物も多数見られた。

学園祭参加の保護者への発信



食育「ごはんの見直し」



(2) 表現力、評価能力の変容をもたらすために

総合演習活動計画シート

回	月日	今日の活動計画	活動の実際	自己評価
5	5月15日			
6	5月22日			
7	5月29日			
8	6月19日			
9	6月26日			
10	7月3日			
11	7月10日			
12	7月24日			
13	7月31日			
14	9月4日			
15	9月11日			

①プランシートとリフレクションシート
 課題決定後からは、活動計画と実際、また毎時間のリフレクションを繰り返しながら、自らの解決活動についてゴールを見据えて修正していくシートを活用させた。

②学園祭展示の他者評価と受講者の相互評価を生かした最終発表

また、2006年度は学園祭後のシラバスを以下のように修正した。

11/9	21	中間発表作品展示と相互評価	各自の展示発表場から学び、相互評価カードを交換する 「賞賛カード」、「質問カード」、「アドバイスカード」
11/16	22	中間発表作品展示と相互評価	各自の展示発表場から学び、相互評価カードを交換する 「賞賛カード」、「質問カード」、「アドバイスカード」
11/23	23	発表内容の工夫・改善	相互評価カードを参考に最終発表にむけて、工夫・改善する。
12/7	24	発表内容の工夫・改善	相互評価カードを参考に最終発表にむけて、工夫・改善する。
12/14	25	オレゴン州「マシュー」の宮院と 知果の存続を育	オレゴン州「マシュー」の宮院と 知果の存続を育 昨年までの発表VTR視聴
12/21	26	最終発表 21	最終発表も同様に、見たりしなから、よさを学ぶ。 他者の発表とどう笑かすかを学ぶ。
1/5	27	最終発表 21	最終発表も同様に、見たりしなから、よさを学ぶ。 他者の発表とどう笑かすかを学ぶ。
2/3	28	最終発表 21	最終発表も同様に、見たりしなから、よさを学ぶ。 他者の発表とどう笑かすかを学ぶ。
2/10	29	相互評価と振り返り	最終発表の相互評価 作品を通して自己の生き方の振り返り
2/17	30		振り返り

一般の幼児や付属幼稚園児と関わった昨年度よりも幼児の保護者対象に発信した研究物も多く見られた。中間発表として位置づけた学園祭展示には近隣住民も含めて多くの来校者があった。その場で得た評価やアンケート結果をもとに、他者から学び、子ども理解に基づく問題解決が進んできた。

さらに他者評価のフィードバックを最終発表に表現する上で、学園祭直後の受講者の相互評価が重要であった。学園祭展示場から作品展示室に移動した研究物を見学しながら、受講者に相互評価させた。相互評価には、「賞賛カード」「質問カード」「アドバイスカード」の3種を準備した。

1点目の「賞賛カード」は、社会的承認を得て、自信や新たな意欲をもつことになった。

2点目の「質問カード」は、伝わっていないことや伝わりにくい情報が判明し、この時点で初めて相手意識や目的意識が確かになったと言える。

3点目の「アドバイスカード」は、最終発表に向けた改善の方向性への客観性と具体性をもった提言

となった。

これら3点のカードは研究物の質を高めるだけでなく、自分とは違う課題に対する関心を深めたり、関連づけたりしながら、互いの評価能力を高めあうコミュニケーションツールとなった。

第3章 研究結果と考察

冒頭で、受講者に変容をもたらす総合演習の内容を特定し、総合演習における「学園祭展示に位置づけた中間発表」と「他者評価及び相互評価」の有効性を検証することを目的とした。この点について、2005・2006年度の「総合演習」における授業満足度及び受講者の自己の振り返りに基づいて考察する。

卒業年度学生による授業評価結果

総合演習 *100%達成 2.00	授業満足度 (12項目)	自己の 振り返り (5項目)
H17年度 (150名) ↓	1.79 ↓	0.55 ↓
H18年度 (104名)	1.91	1.17

全体的には、2005年度より2006年度は、授業満足度・自己の振り返りともに確実に向上している。特に、低かった自己評価が2倍以上になっている。その理由を分析し、詳細を振り返りながら次に挙げていくこととする。(評価項目は、学内共通の授業評価に同じ。ここでは掲載を省略)

1. 受講生に変容をもたらしたと思われる授業の特定

(1) 課題設定力の変容

2005年度は、自らのテーマ設定の最大の根源は、学生同士のインタラクション (interaction) にあると筆者は考えていた。しかし、第5回目を過ぎても課題設定ができないまま実習に出る学生も存在するなど個別指導に相当な時間を要した。課題設定理由を詳細に吟味し、目的も明確にしたはずの課題を安易に転換したり、中間発表の時期を迎えてもテーマを変更したり、他者に依存して別の課題グループに属したりなどする学生も一部には見られた。

2006年度は、実態把握調査を試みた結果、「現代の子どもの実態にふれる機会が日常的にはない」(93%) や「自らテーマを選択及び決定して学んだ経験や記憶や自覚がない」(72%) という現状であった。このことから学生同士のインタラクションは困難であると考えた。しかし、学生同士のピア・ラーニング (peer learning) によって相互刺激による、見通しや学びを持つことが必要である。特に、導入期に前年度の作品展示見学を進める中で誘発され、課題設定を早期に決定して研究の方向性を確立することは有効であった。その結果、第5回目での受講生の自己評価は「自ら課題設定ができています」は2005年度の52%から2006年度は89%へ変化した。とりわけ、専門性をもった保育者としての意欲や自信につなげるために「子どもに関わるテーマ」に限定したことが具体的な課題設定を可能にしたと考えられる。

(2) 情報収集・活用力の変容

○アンケートの作成指導

学びの基本的スキルとして、アンケートの作成方法について指導する時間を設定した。衛生看護学科のアンケートに協力する機会があった。その際、答える側になってアンケート設問はどうあるべきかを考えた。アンケート作成の基本条件や集計方法についても、ほぼ全員が「アンケートの作成方法について初めて学ぶ機会を得た」という実態も確認できた。

○実習園におけるインタビュー

幼児に対しての調査は、文字情報で得る質問紙調査は困難である。また、対象者が日常的に学生の周囲や近隣に殆ど存在しないことも調査が困難である理由にあげられる。幼稚園・保育所・施設実習の機会をとらえ、実習園及び施設でのインタビューについて指導した。総合学習における4つの工夫としての「時間の工夫・場の工夫・人の工夫・形態の工夫」はまさに実習期間における保育現場で「face to face interview」のすすめをしたことでその工夫が可能になったといえる。また、そのことを確認するために前期終了時にレポート課題としたところ、実習期間における保育現場で「face to face interview」を通して、子どもとの関わりが深まり、子ども理解の機会となったとリフレクションしている学生は90%であった。

2. 学園祭展示における中間発表の位置づけと他者評価及び相互評価の有効性の検証

中間展示発表を受けてリフレクションしながら修正し、最終発表にまとめていく。それに向けて質を高めることに教師はどう関わるかは、検討を要した。総合演習は学生が自ら学ぶ姿勢やその考え方、学習スキルを身につける授業である。専門科目のように、レポートの質を高めることが第一義ではない。そこで、授業者がコメントをして質を高めることを意図的にしなかった。授業者は受講者と同じ聞き手、参加者として働きかけることとした。評価的なコメントではなく、質を高めるコメントが重要である。

学園祭展示における中間発表の位置づけと他者評価及び相互評価の有効性については、受講者に実施した自己評価を4段階評価で次のように捉え、その割合を出した。

ア. 学園祭展示でのアンケートや評価は最終発表の表現の工夫改善に生かされたか

イ. 相互評価は最終発表の表現の工夫改善に生かされたか

①とてもそう思う ②どちらかと言えばそう思う : 肯定的評価

③どちらかと言えばそう思わない ④全くそう思わない : 否定的評価

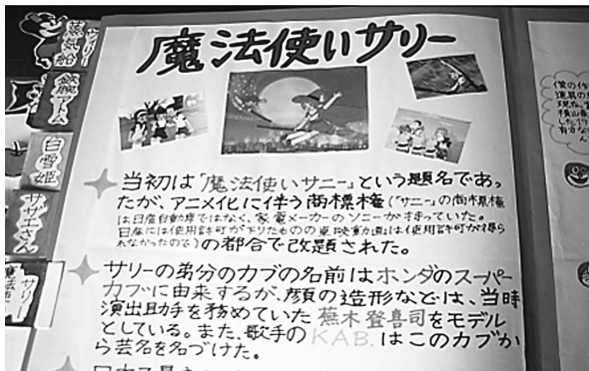
その結果、肯定的評価は次の通りである。

ア. 学園祭展示でのアンケートや評価は最終発表の表現の工夫改善に生かされた・・・85%

イ. 相互評価は最終発表の表現の工夫改善に生かされた・・・・・・・・・・93%

受講者にとっては、制作展示物に対する他者からの評価、つまり学園祭参加の幼児やその保護者、または他学科や他学年の学生からのアンケートやコメントが有効であった。どのように伝わったのか、何が反響や共感を得たのか、また十分伝わらなかったのかを客観的に得る機会となったからである。さらに、学園祭直後の展示見学を受講者同士で相互評価することによって、改善の方向性を見出す契機と具体性が明確になったと思われる。次に相互評価を改善に生かして表現できた作品例から考察する。

アニメの歴史と文化



子ども文化 「アニメ分析・ヒーローの魅力」



上記の研究物「アニメの歴史と文化」は、子どもがどのようなアニメに関心をもち、その共通の夢や願いは何かを探ることを目的とした研究物である。実習園では子どもの持ち物はキャラクターグッズが殆どであることや子どもの会話に多くのアニメの登場人物が出てくることが観察やインタビューを通して情報収集していた。

中間発表の段階では、子どもが関心のあるアニメを調査したものを作品を羅列的に冊子にまとめて展示していた。展示見学後の相互評価で、アドバイスカードには「研究物の個々のアニメにストーリー性はないので、どのページにどんなアニメがあるかの全体を示していけばよい。途中から見たいところが開けられたりする工夫があれば活用しやすい。」という類のアドバイスが多くあった。それを受けて全体の内容をインデックス（写真左端に縦に並ぶインデックス）で示すよう改善し、日常の保育活動でも保護者懇談会においても活用可能なように工夫している。また、約80枚の賞賛カードを得て、社会的承認を得た満足感や自己実現の喜びをもったのである。

最終発表会では、「マンガは悪」「絵本を子どもに」という画一的指導ではなく、いかに質の良いアニメの世界が子どもの心を育てたり夢を広げたりすることに寄与しているかにも言及した主張をさらに強化した内容に改善された。アニメやコミックで育った世代の保護者が台頭する中で、子育て支援の一つとして保育現場で理解を得やすく共感を呼ぶ研究物として活用できるものに改善されたと言える。

次に、受講者の感想を「活動振り返りワーク」から自己の生き方の更新の部分进行考察する。

「世界の子育て」の課題設定したグループ5人の受講者は、1週間アメリカでホームステイしながら、近隣の幼児施設見学や家庭のインタビューを通して日本の子育てとの相違や共通点をまとめた。また玩具も収集したり制作したりしながら中間発表の展示をした。内容は関心を引くものであったが、自らの体験を伝える力が十分でないことから、学園祭参加の保護者や受講者同士の評価は高くなかった。

そこで、付属幼稚園でアメリカの幼児施設を再現する様子をVTRに収録して、最終発表した。制作物だけでは伝わりにくかった内容について、世界の子育てには違いがあることや、価値観や文化の違いなどの理解を一層促進させた。実習先も時期も同じではない5人が様々なトラブルを乗り越えながら分担してよりよい発信の方法にたどり着いていくプロセスを筆者はサポートすることができた。そのゴールに他者から得た具体的な多くのアドバイスが支えとなっていたからと思われる。以下に最終発表後のリフレクションカードから自己の振り返りについて抜粋した。(学生の感想①)

学生の感想① (活動後振り返りワークより)

1年間を通して総合演習で学び、自分自身少し成長できたと思う。自分で調べたいことをみつけ、1冊の本に仕上げた。今までは、誰かに出された課題など、自分で調べたいと思っていなくてもしょうがなくやっていたけど、今回は自分で調べたいと思って先生や友達に助けられながら最後までやり遂げることができた。この授業でやってきたことはこれからもきっと役に立つと思う。

「世界の子育て—アメリカと日本の比較研究—」
(5人でアメリカでホームステイ後、付属幼稚園でVTR収録) 0, T

国際理解(世界の子育て)



学生の感想② (活動後振り返りワークより)

「植物が食に生かされていることを知りたくて始めた研究。自分が興味を湧いたものに出会って感動した。調べていく過程で人と人との結びつきや縁、大切さを改めて感じた。人に感謝する事の大切さ、でもそれだけではいい加減、自分も何かしなければ。(中略)

自分の不快感を弱める術を知り、人には欠くことができない「人間関係」を保護者同士も子ども同士も築いて欲しいと思うし、自らもそうでありたい。

「植物が人を癒してくれる効果研究—お花が大変身—」 I, Y

学生の感想③ (活動後振り返りワークより)

1つ目は、アンケートの実施や調査がとても楽しく感じられた。今までの私だったら、「誰かがやってくれるから私がやらなくてもいいや」とすごく適当だった。自分の予想や見通し「これは、きっと・・・」と言う活動の楽しみが分かったからだと思う。2つ目は私が調査したことを発表したり、他の人の発表を聞いたり、またその意見を聞いて改善を考える、またそこで自分で考え答えを出すという学び方を獲得した。3つ目は、新聞や広告をしっかりと読むようになったこと。私の周りだけでなく色々な地域の人の暮らしや環境が分かるということ。この総合演習という授業で自分を変えることができたと思う。見直すこともできたと思う。自分が成長したな、一歩進んだなと思える楽しい授業でした。(後略)

「子どもの好きなお菓子博士」 U, S

また、その他のリフレクションカードで、上記の学生の感想②③で見られるような「人間関係づくり」や「学び方の獲得」「自己の成長」について振り返っているものが95%あった。

総合的な学びにおいては、課題設定、情報収集・活用・整理・分析、思考・表現、発信という一連の課題解決活動がある。本稿は特に導入期と収束期の活動の2時点を捉えて受講者の変容をもとに考察してきた。89%の受講者が「大学までに総合学習で学んだことがない」と答える実態の中で、学び直しを繰り返しながら自己効力感が生まれ、幼児教育に関わるものとして専門性をもった保育者としての意欲や自信につながったと思われる。

第4章 まとめと今後の課題

これまで、受講者に変容を促す総合演習のあり方について、「学園祭展示を中間発表に位置づけること」と「中間発表での他者評価及び相互評価」が有効であることを学生による授業評価と自己評価及び研究物の成果等の根拠を示して検証してきた。

第一に、総合演習において、課題設定力の変容をもたらすには「保育現場で活用できる調査研究物の作成」への意欲付けが有効であった。また先行研究から学ぶ機会の確保として、質の高い研究物を学内で保管し活用できる環境が必要である。

第二に、表現力、評価能力の変容は、評価を改善に活かす活動の積み重ねから生まれるということである。自らの研究を中間発表時点で見直し、改善に生かす機会が重要であり、「学園祭展示」の場とその直後の相互評価の時間の設定が有効であった。その結果、他者評価を根拠として、主体的に表現力を駆使して相手意識や目的意識を認識しながら制作物をリメイクしていくことで、研究の質と共に自己評価が高まることとなった。

つまり、最終発表での評価だけでなく中間発表後の評価活動を充実することによって、実践的な評価者を育てることにつながると言える。「知の総合」を唱える総合において、自らの生き方をレフレクションことにもなるのである。

学習指導要領はほぼ10年に1度改訂されてきた。文部科学省は平成19年8月末に学習指導要領の改訂を審議する中央教育審議会の小学校部会に改訂の枠組みの素案を示した。その内容は授業時数が1割増える中で、「総合学習」は3分の2程度に減ることになる。また中学校についても授業時数を1時間増やし29時間にする中で「選択教科」と教科横断的な「総合的な学習の時間」（総合学習）を削減するというものである。ゆとり教育の象徴として語られた総合学習は、実践における課題が解決されず、子どもの育ちの検証も十分に行われないままの時間削減となったのではないだろうか。

この時間の創設は学力伸長を軽視した施策ではなかったはずである。今後は、総合学習本来の意義を再確認する実践研究が必要である。設定された時間の活用方法の研究から、確かな育ちの検証研究という、まさに量からの質への転換が一層求められるということであろう。

高等教育においても量の確保も当然のことながら、初等・中等教育と同様に量からの質への転換が一層求められている。大学での学びは高度な実学を身につけた実践的人材の養成であり、社会のニーズに応える実学の研究と教育が一致したものとなることが重要である。

大学におけるパラダイム変換が求められて久しい。近年、大学における教育改革の取り組みとして「大学の授業改善・授業開発」が盛んに行われてきた。マーチン・トロウ（1976）は「高学歴社会の大学」において、ユニバーサルアクセス型の新しい経験と提案であるとしている。「教育というものは重要な技術であり、教授法を教えることと評価することが大切になり、かつ大学という最高学府においてすらもはや研究の内容は最重要事項でなく、学生と彼らを教え導くことが最も重要になる。」と述べている。

筆者は、教え導くことの改善として、総合演習は探求活動であるという認識のもとに「講義型・能動的学習者」から「学生主導型・能動的学習者」へと進めてきた。実は、探求していくことは習得と活用とを行きつ戻りつしながら、ようやく深められていくということである。このプロセスこそが学びの質を高め、自らの学び方をも探求していくことになるのである。

これまで総合演習の授業考察から述べてきたように、学びのゴールは、保育者として社会に送り出すことではない。「遊び知らない子ども」に「遊びを知らない現代の受講者」がどのように「遊び」の価値や遊びのスキルを習得して価値を探求して行くかには受講者自身の幼児期からの振り返りが必要とも

なる。教え導きながら、新しい経験と提案をする総合演習のあり方を探求していきたい。

最後に、残された課題について取り上げる。総合演習の課題設定については、受講者の関心をコアにしていくと同時に学問的・社会的な重要な課題につなげていくことが必要である。初めから「学生主導型」で、我が国社会全体にかかわる課題の設定が自ら可能になるものではない。しかし、保育者養成においては、「子どもに関わるテーマ」というフレームを限定した「講義型」で進めつつ、結果として我が国社会全体にかかわる課題設定になった。それだけ、子どもの問題は社会全体の問題と重なるともいえることを再確認することになるのである。これまでと比較して2007年度の設定課題には、食育や安全、虐待問題などが増加する傾向にある。

本研究は、課題設定のあり方の探求を軸とした結果であり、課題選択や意志決定のプロセス及びその妥当性についての考察吟味に至っていない。その課題については紙幅を改めて検討を行いたい。今後は、2005年度以降の設定テーマについて、学問としての様相や個人にとっての意義等から分析して次の研究につなげ、総合演習を通して大学の授業改善・授業開発を模索し続けていきたい。

【引用・参考文献】

- (1) 汐見稔幸 (2007) 「これからの子育て支援を考える」『日本乳幼児教育学会公開講』 pp. 16-17
- (2) 溝上慎一 (2004) 「学生を能動的学習へと導く講義型授業の開発—学生の内的世界のダイナミクスをふまえた教授法的視点」『教育学研究第70巻第2号』(日本教育学会) p. 165-166
- (3) 保育士養成資料集第46号保育士養成システムのパラダイム転換「—養成課程のシークエンスの検討— (2007) (社団法人全国保育士養成協議会) pp. 85-87
- (4) 山崎保寿 (2003) 「総合的な学習の時間のカリキュラム効果に関する実証的研究—高等学校における総合的な学習の時間の先進校に関する調査研究に基づいて—」『カリキュラム研究』12 pp. 64-71
- (5) 木村吉彦 (2006) 「受講生に実践的力量を付けるための大学における生活科授業の探求」(日本生活科・総合的学習教育学会せいかつ&そうごう第13号) pp. 64-71
- (6) マーチン・トロイ、平野郁夫、喜多村和之 (1976) 「高学歴社会の大学」(東京大学出版会) pp. 80-87
- (7) 梶田勲一監修：加藤明・善野八千子・松田智子 (2001) 「地域で学ぶ子どもの育ち・生活科と総合的な学習との接続」『総合的な学習の時間創造のための基礎・基本—地域と学校の特色を生かした実践とその評価—』(文溪堂) pp. 18-28
- (8) 善野八千子 (2004) 「生活科の学力と求められる指導力」『教科の学力・指導力』人間教育研究協議会編 (金子書房) pp. 50-60